

捕鯨問題とは何か

－「くじらを釣りたい」から始まった、海洋資源についての考察－

保健・福祉ゼミ 石頭 滯 佐藤 優雅

キーワード 鯨 捕鯨問題 国際問題

1 はじめに

私たちは最初、ゼミ研究のテーマ決定の段階において「くじらを釣ってみたい」と考えた。その理由は、自分達が住んでいる、釜石・山田地区にはかつてクジラの食文化が深く根付いており、家族や地域社会でもクジラが生活の一部となっていた歴史を度々聞いて育ってきたからだ。しかし、探究の初期段階で、ニュースにも取り上げられる「捕鯨問題」に突き当たった。そこで、現在における諸外国との捕鯨にまつわる問題や、クジラの海洋資源としての利用について研究を行い、本稿にまとめた。

研究を行うことで、日本を含む捕鯨賛成国と反捕鯨国との価値観の違いについて明らかにし、いわゆる「捕鯨問題」の本質に迫ることができると私たちは考えた。

研究の始めに、山田町にある「鯨と海の科学館」館長に連絡し、当初の目的であった「クジラを釣ること」について問い合わせた。すると、クジラを釣ることは不可能だということが分かった。クジラは哺乳類であり、哺乳類を「釣る」行為そのものが動物虐待にあたるという理由だった。私たちの当初の目的は果たせなくなってしまった。

釜援隊との出会い

SSHの中間発表会をきっかけとして、我々は釜石リージョナルコーディネーター（釜援隊）のメンバーであり、現在岩手大学職員の齋藤孝信氏（以下齋藤氏）らと出会った。インターネットや図書館からの情報収集に限界を感じていたが、齋藤氏との対談がきっかけとなり、さらに探究を前進させることができた。具体的には、齋藤氏を通じて笹川平和財団の「海洋教育パイオニアスクー

ルプログラム」に申請し、各種プログラムについて助成を受けることが決まった。これによって充実した実験や調査を進めることができた。

2 調査・実験

2-1 湊敏^{さとし}氏との対談

山田町にある「鯨と海の科学館」を訪問し、見学とともに館長の湊敏氏との対談を行った。世界遺産に登録された東北・北海道の縄文遺跡群で発見されたクジラの骨からも分かるように、我々が考えている以上に広い範囲で、クジラの肉や骨、油が経済活動に影響を及ぼしていた。また、クジラは適水温を求めて遊泳するため、移動するクジラを追って捕鯨船も季節ごとに漁域を変えていた。捕鯨を行わない、陸で暮らす人々は、通年でクジラに携わるわけではなく、まさに「季節労働者」であった。この他にも、湊氏との対談からは多くの新たな発見が得られた。また今後の探究の方向性が見えてきた。

2-2 クジラを探す

クジラを釣ることはできないが、せめてこの目で見てみたい。そう思った私たちは、6月から7月にかけて、漁船をチャーターして釜石沖合を中心とするクジラ探索を行った（図1、2）。探索には、盛岡市のドローンを扱う企業にも参加してもらった。漁船のやぐらの上から目視を行うとともに、上空からのドローン撮影による映像を併せて探索するという本格的なものとなった。2度にわたって調査を行ったが、結果的にはクジラを発見することができなかった。しかし、太平洋で飛び跳ねるマグロ、水面をきらびやかに泳ぐイワシ、

そしてエイやトビウオなど、様々な生物が生きる豊かな海洋を目の当たりにし、感動すら覚えた。海洋は途方もなく広いことを肌で感じるとともに、この海が全ての生命を育てており、自身もその一部であるという感覚も得ることができた。何度もクジラを見ている漁師との対談からも、クジラの豊かな生態について学ぶことができた。



(図1) 漁船「嶋福丸」とドローン



(図2) 船長の三嶋氏とドローン会社とともに撮影

2-3 仮説を立てる

日本ではクジラを貴重な海洋資源として利用した。食料だけではない、多面的なクジラの活用によって、沿岸地域を中心とする豊かなクジラ文化圏が形成され、私たちはその地で生きていることが分かった。だが、齋藤氏や湊氏との対談を通して浮かび上がったのは、日本と海外の捕鯨に対する価値観の違いである。私たちは、どうしてここまで考え方に違いがあるのだろうと疑問に思った。そこで、文献を調べながらいくつかの仮説を立てた。

仮説1

一つ目の仮説として挙げられたのが、宗教が関係しているのではないかと考えた。海外の宗教は動物を神や神の使いとして祀られていることが多く、クジラも神やその使いとして扱われているのではないかと考えたからだ。

仮説2

二つ目の仮説として考えたのは、そもそも「クジラは絶滅危惧種で保護しなければならない」という価値観が海外では主流になっているという見立てだ。もしクジラが絶滅危惧に認定されていれば海外ではもちろん日本も捕鯨は禁止されているだろう。

仮説3

最後の仮説としてクジラが食用として日本以外の国、また捕鯨禁止国の間で口に合わず、食用としてのクジラが重宝されていない、というものだ。

日本と海外では味覚の面で違いがあり、日本で食べられていても海外で食べられない食材は多くある。もしクジラもそうであれば、海外で捕鯨が禁止されることとも関係があるのだろう。

3 結果と考察

3-1 仮説1の結果と考察

捕鯨禁止国が多い欧米と日本とでは、宗教的な面でも違いが多い。その中でクジラに関しての宗教的な違いはあるのだろうか。

文献によると、キリスト教圏では魂と霊は知性があるものに宿り、その代表が人間である。また、欧米ではクジラには知性があり、賢い生き物と信じられてきた。よってクジラにも魂があり、霊が宿ると信じられてきた。このことから欧米では、クジラを殺すことは可哀想という価値観が生まれ、捕鯨の禁止が主張されているようだ。日本には欧米のような考え方がないわけではないが、地域の生業としての捕鯨は当然の行為であった。

3-2 仮説2の結果と考察

私たちはインターネットを使って、絶滅が危惧されているクジラの種類を調べてみた。その結果、以下のような分類ができた。

- ・危機（増加）：シロナガスクジラ
- ・準絶滅危惧：イッカク
- ・危急：マッコウクジラ
- ・低懸念（増加）：ミナミセミクジラ
ザトウクジラ
- ・低懸念（安定）：ミンククジラ
コククジラ
- ・深刻な危機：ヨウスコウカワイルカ
- ・危機：セミクジラ・イワシクジラ
タイセイヨウセミクジラ
ラプラタカワイルカ
- ・低懸念：ミナミトックリクジラ



(図3) 加熱処理された鯨肉

全部塩味	味	食感	にまじ	脂量
マグロ	おいしい(刺身)	硬い(肉)	ない	ない
ブタ	おいしい(肉)	柔らかい	ない	いつもの
牛	おいしい(肉)	柔らかい	ない	いつもの
クジラ	おいしい(肉)	硬い	ない	少ない

(図4) 各種食肉との比較

上記の分類を見ると、絶滅が危惧されているクジラの種類の方が多く見える。確かに、シロナガスクジラやヨウスコウカワイルカは絶滅が懸念されている。しかし一方でミンククジラのように増えすぎている種類もある。したがって、一概にクジラの絶滅が危惧されているとは言えない。このことから、絶滅が海外の捕鯨禁止に影響を与えているとは考えにくい。

3-3 仮説3の結果と考察

クジラの食文化について知るため、「鯨肉を食べしてみる」実験を行った(図3)。クジラとの比較対象にはマグロ・豚・牛を選んだ。クジラと同じ哺乳類である豚・牛との食味を比較するとともに、日本人にとって海洋の魚類の代表格であるマグロとの食味も比較した。なお、肉の食味をそのまま味わうため、味付けは薄い塩味とし、加熱処理したものを食した。また、ゼミのメンバーだけではなく、担当教員や他のゼミ生にも食べてもらい、その感想をまとめた(図4)。

鯨肉は同じ海洋生物であるマグロよりも、牛や豚の陸上生物の肉に近い食味であることが分かった。特に、牛が一番近いという意見が最も多かった。しかし、かむ回数が多くなるにつれて、鶏肉のささみのようにパサパサになっていった。

食習慣が異なる日本と外国とでは、味覚に違いがあるのは当然である。しかし、日本やアジア特有のものでも、欧米の人々に受け入れられ、食べられている食材もある。例えば、刺身は一見食べられていないように思われるが、寿司文化が世界的に受容されているように、国境を越えて食べられている。

このことから、異国間での味覚の違いが捕鯨に関係があるとは断言できないと私たちは考える。また、日本人は明治まで豚や牛を食べる習慣がなかったため、鯨肉がこれらに代わる重要な食資源とされていたことを、実際に食べることで知ることができた。

4 日本鯨類研究所との対談

仮説1・2・3から、どうやら捕鯨問題には私達が思う以上の複雑な要素がそれぞれの国にあり、一筋縄では解決できないことが分かった。そこで私達は、捕鯨問題についての理解を深めるために、日本の捕鯨を取り仕切る組織である日本鯨類研究所とのリモート対談の機会を得た(図5)。所長のゴメス氏をはじめ、日本のクジラ研究の第一線で活躍されている方々から、専門知識を交えながら具体的に教えてもらうことができた。対談の冒頭から、ゴメス氏からは私たちの探究のテーマ設定について何度も掘り下げて問われた。中途半端な動機からは、質のよい研究成果を得られないと諭されたような気がして、背筋が伸びる思いだった。

また、クジラを取り巻く環境等の諸問題や、歴史・文化についてより深く教えていただき、理解することができた。研究所との対談を通して、改めてクジラの水産資源としての価値や、生物としての存在価値を学ぶことができた。



(図5) 日本鯨類研究所 ゴメス所長

5 まとめ

ゴメス氏との対談の中で、印象に残った問いがある。それは、何が捕鯨を「問題」たらしめているのか、という根本についての問いだ。今や国際問題となって久しい捕鯨問題であるが、日本をはじめとする捕鯨賛成国と反対国の溝が埋まる気配はない。宗教や倫理などの文化を背景とする対

立に、政治的な問題までが複雑に絡み合い、引っ張りすぎて解けなくなった結び目のようになっている。

2018年に日本は国際捕鯨委員会(IWC)を脱退し、商業捕鯨を再開させた。これに対する反応も、インターネットを開けば様々な賛否両論が転がっている。安易に判断せず、私たちはここで、ゴメス氏の問いについて考えるべきではないのか。何が捕鯨を「問題」たらしめているのか、これについて腰を据えて考えることは、争っている両者が、その妥協点を探る糸口をつかむきっかけになる。少なくとも、結び目を緩めることはできるはずである。

クジラをはじめとする海洋資源については、誰もがその重要性和保全の必要性を理解している。これが、両者がともに考えるための、テーブルと椅子になるのではないだろうか。

6 謝辞・出典

共同研究者である齋藤氏には、調査のあり方や考察の方法など、細部にわたるご指導をいただきました。ここに感謝いたします。また、研究を進めるうえでお力添えをいただいた皆様のお名前をあげて深謝いたします。

岩手大学	齋藤孝信	様
		様
鯨と海の科学館	湊 敏	様
嶋福丸	三嶋 淳	様
日本鯨類研究所	ゴメス	様
笹川平和財団		様

出典

岸上伸啓(2020)『捕鯨と反捕鯨のあいだに』
臨川書店

森田勝昭(1994)『鯨と捕鯨の文化史』名古屋大学
出版